歴史資料館だより

発行者　聖隷歴史資料館
〒四三三－八五五八
浜松市三方原町三四五三
聖隷クリストファー大学二号館二階
TEL　〇五三（四三六）五三一一
FAX　〇五三（四三九）三三四七

ともに歩んでくださった神に感謝

社会福祉法人 牧ノ原やまばと学園理事長　長沢　道子

西ドイツのヴァイツゼッカー元大統領は、「過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在にも盲目となる」と語りましたが、このたび、学校法人『聖隷学園』をとおして当法人の過去を探るチャンスを与えられたことを心から感謝致します。また、(株)電通関係の皆様は、専門的知識や技術を駆使して立派な作品を完成して下さり、有難うございました。

今回、特別展の原案作成に関わって、私は改めて、長沢前理事長がやまばとの歩みを語るとき、「あかし」ということを重視していたのを思い出しました。彼によれば、「あかし」は、証し人や殉教者をも意味する言葉で、それは、立派な内容を知らせることではなく、たとえ失敗であっても、真理を指し示すことだというのです。そういう意味で、私もできるだけ事実を取り上げることにしたのですが、限られた展示面でもあり、「あかし」になりえたかどうか、心もとない面もあります。

牧ノ原やまばと学園の主人公であるハンディキャップをもった人々と高齢者の皆さん、そして、喜怒哀楽を共にしたご家族やスタッフの皆さんの歩みは、小さなパネルにしか載せられませんでしたが、そういう歩み全てを含めて、牧ノ原やまばと学園が指し示しているものは何でしょうか？私自身は、こう思っています。「この事業は、一人一人をこよなく愛しておられる神によって始められ推進された」、そして、「互いに赦し合い、助け合って生きるとき、一人一人の生命が、生き生きした喜び多いものに育っていく」と。

福祉施策や制度は様々に変化しますが、どんな時代にも傷ついた人や孤独な人、不安と苦悩を味わう人は、跡を絶たないでしょう。一人一人の生命が損なわれたり抑圧されたりすることのないように、今後も私共は、最適の制度や方法を活用して、生命を育てる援助をしていかねばならないと思わされます。

今回の展示で大きなスポットを浴びているのは、創設者の長沢巌、そして、メイ・マクラクラン宣教師です。それは、現施設長を初め多くの人々が要望したことでしたが、牧ノ原やまばと学園・三十三年の歴史から二人を見ると、長沢は十三年の関わり、マク先生にいたっては全く関わっていません。

それにもかかわらず、二人が牧ノ原やまばと学園を代表する人としてとらえられているのは、施設誕生のずっと以前から、二人は牧ノ原やまばと学園の土台を掘り続けてくれたと考えられるからです。誰をも愛し、助けを必要とする人には惜しみなく手を差し伸べたマク先生。そして、教会員や親御さんたちと地道に信頼関係を結んでいった長沢牧師。そういう二人の実践があって初めて施設は誕生できたと、誰もが受けとめているからです。

「私を見るのでなく、私の背後にいる神を見てください」と語った二人の生き様を知って、神に目を開かれ、二人の意志を受け継ぐ人々が多数起こされますよう願っています。

私はまた、牧ノ原やまばと学園と、教会との関係についても、こんなことを気づかされました。現在は比較的密接な関係を保っていますが、しかし、時代が変わり、人が変わるとき、その関係は個人的な関係、恣意的な関係になる危険をはらんでいるのではないかと。キリスト教社会福祉の働きを深め広めていくためには、教会と最適な協力関係を築く必要があり、そのためには、個人の去就によって影響をうけないような仕組み、例えば、定期的に教会関係者と施設関係者が集い、聖書だけでなく現実のお互いの課題をも学び合い、祈り合い、助け合っていく、そういう形にする必要があるのではないかと思うのです。勿論、これにも問題はあるのでしょうが、それでも今は、形をとおして協力関係を確かなものにしていくことのほうが重要に思われます。

最後に、このような機会を与えられたことを感謝し、聖隷グループ一つ一つの上に、神の祝福が豊かにありますようお祈り致します。

特別展開催礼拝説教

「愛されること、仕えること」

榛原教会　牧師　菊地　啓示

主イエスさまは、今、弟子たちの真ん中におられ、幼子を抱いておられます。弟子たちが主イエスさまに目を向けると、その目には主イエスさまと共にいる幼子が映り、また、幼子を見ようとする弟子たちの目には、幼子と共におられる主イエスさまがその目に入ってきたでしょう。当時、幼子と言えば、「無力、無能」なもの、また役立たずの足手まといと見なされていました。けれども、主イエスさまは子供の手を取って、抱き上げ、「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである」、と言われるのです。

誰にでも、弱さや小ささ、醜さがあるものですが、それを隠せないのが幼子、上手に隠しているのが大人だ、と言えるかもしれません。主イエスさまに従ってきた弟子たちにもそれがありました。弟子たちは「だれがいちばん偉いかと議論し合って」いたのですが、大人でしたので、主イエスさまから「何を議論していたのか」、と尋ねられても、「黙って（隠して）」いたのです。

主イエスさまは今ここで、弟子たち（大人たち）のそのような弱さ、小ささ、醜さの場所を照らしておられます。その御腕に幼子を抱き上げることで、御自身が、弟子たちの弱さ、小ささ、醜さを抱き上げ、受け入れておられることをお示しくださっているのです。

自分の中にある弱さ、小ささ、醜さ、貧しさを主イエスさまが受け入れてくださっている。このような私であっても主イエスさまに愛されているのだ、と知ることができた時、私たちは自分と同じように主イエスさまを通して神に愛され大切にされている目の前の弱く小さな存在を受け入れ、愛するようになることでしょう。そして、その人と共におられる主イエスさまを見出すことが出来るようになるでしょう。ですから、わたしたちはこの主イエスさまの御前で「大人ぶる」ことをやめましょう。自分の醜さや弱さを押し殺したり隠したり、切り捨てたりしていてはなりません。神がこのような自分を受け入れてくださっている、という安心感なくして、どうして他の人の弱さや醜さを受け入れ、そこにおられる主イエスさまを見出すことができるでしょうか。

弱さや小ささを隠したがる大人であっても、隠さずそのままで生きている子どもであっても、わたしたち皆が主イエスさまの御前では、「いと小さき者」です。わたしはこの箇所を読みながら、「いと小さき者」を抱き上げて、いつくしんで目を細め、頬擦りするほどに喜んでおられる主イエスさまを思いました。

長沢　巌牧師は「ともに祈る」という文章の中で、やまばと学園の働きについて次のように語っておられます。「…。それは伝道によって救いに導かれたわたしたちが、この世にあってどうしてもしなければならない奉仕のわざであるからです」。この小さなわたしがゆるされ、受け入れられ、愛されている。牧ノ原やまばと学園は、「いと小さき」わたしたちを受け入れ、いつくしんでくださる主イエスさまの愛に打たれて生み出されました。これからも、主イエスさまの愛こそが、障害を負った人にもそうでない人にも、深い安心と喜びを与え、互いに仕え合う原動力となることでしょう。主イエスさまの御名をほめたたえます。

（マルコによる福音書　9章33節～37節）

◆刊行物のご案内

長谷川保・長谷川八重子・堀口　勇　著

「聖書における愛の実践」

「聖書における愛の実践」は、一九八八年五月に光雲社から刊行されました。一九七三（昭和四八）年にイエスの友会全国聖修会が浜名湖エデンの園を会場として催された折、この会に出席した方々は、主題講演をされた長谷川保の講演を通して、医療と教育と社会福祉の一大事業がキリスト教の原理に基づいて展開されている事実に接し、驚嘆しました。

その感動をその場限りで終わらせないために、酒々井教会（千葉）の堀口勇牧師と湯河原教会（神奈川）の金子益雄牧師をはじめとする有志の呼びかけで「聖隷友の会・長谷川保を囲む会」が作られました。会はその後一三年間にわたり毎年八月に二泊三日の集会を開き、長谷川保・八重子夫妻を講師として「信仰による義を現代社会においていかに愛の実践として展開すべきか」について学びが続けられました。

「わが青春」と題する第一章は一九八三年三月から四月にかけて静岡新聞に掲載されたものの転用で、第二章の「隣人愛に生きる」は堀口勇牧師のもとに残されていた数十本の講演テープがもとになって記されました。その内容は「夜もひるのように輝く」やその他の著書とも一部重なるものですが、結核患者の救済のこと、特別養護老人ホーム十字の園や高齢者世話ホーム「エデ

牧ノ原やまばと学園特別展の展示品紹介

社会福祉法人 牧ノ原やまばと学園
法人事務局長　吉﨑　伸男

今回の特別展は、創立三十三年を迎えた牧ノ原やまばと学園の原点をまとめることで、時代の大きな変化の中で、今後目指すべき歩みをさぐる良い機会となりました。

特別展の内容は次のようになっています。＝は展示の種類を示し、―は展示の具体的な内容を示します。

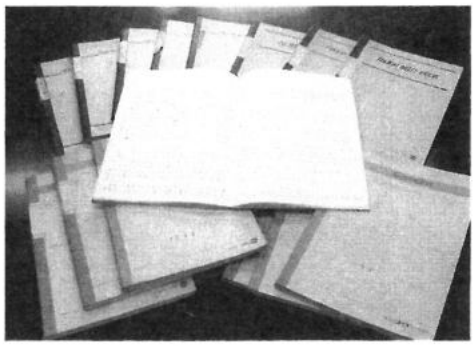
まず、正面パネル下の展示品は、自らが重度心身障害者となって、病床にてやまばとの歩みを見守って下さっている創設者の長沢巌のものが中心となっています。病床に臥すまで毎日事実を記録していった日記は、年度ごとにきちんと綴られ、長沢巌の人となりを端的に表しています。手帳には、祈るべき人として教会員の氏名だけでなく、町長や総理大臣の名まで記されているのも興味深いことでしょう。

また、創設より発行している機関紙は、現在三五〇号ほどになりますが、すべてに目を通すのは大変なことなので、今回は正面の三枚のパネルに「やまばと学園への道」、「牧ノ原やまばと学園の理念」、「やまばとの働きの広がり」という題で簡単にまとめ、その下には年表で三十三年のあゆみも表しておりますのでご覧下さい。創設期からのエピソードは、すべて記すことはできませんでしたが、「こころに残る思い出」としてパネルにまとめて紹介しております。

また、会議室の壁面には、創設者・長沢巌についてや施設誕生に多大な影響を与えたマク先生の紹介、牧ノ原やまばと学園の土台を築いた四人の方々、大井淳地・宮崎道子・板倉静夫・深井吉之助氏の紹介、そして、現在の各施設の紹介をパネルにて展示しております。その他、「ともに生きる」と題したDVD・ビデオも必見でございます。映像を合わせてご覧になると、牧ノ原やまばと学園が目指してきたものがさらに皆様に伝わることでしょう。是非お楽しみ下さい。

今回の特別展で、静岡県中部の「榛原町」という小さな町の小さなキリストの教会が中心となり、紆余曲折を繰り返しながら、地域で暮らす知的障害者や高齢者の命の輝きを、地域に伝え歩んできた歴史を、是非多くの皆様にご覧になっていただければと思います。

テーマパネル



几帳面に大学ノートに綴られた日記

ンの園」が作られた経緯、障害児者問題、そしてホスピスについて語られている他、八重子夫人と過ごした五〇年を振り返って、どんなに苦しく辛い時でも愚痴一つこぼさず、不平も不満も漏らすことなく、つき従ってくれたことへの感謝のことばが印象的です。講演テープがもとになっていることから、いきいきと語る在りし日の姿が思い起こされます。第三章「長谷川保とともに」は貴重な八重子夫人の講演を起こしたものです。結婚五〇年の過ぎ来し方を思い起こして、初めて教会を訪ねたときのこと、信仰の原理と実践の力をしっかりと叩き込まれた神学校での学びのこと、ベテルホームでの患者さんのお世話の様子から霊的な信仰生活と愛に愛をもって応答して生きる実践の証があることを知ったことなどが語られています。八重子夫人は真実の中でも最も真実なことがあるとすれば、それは「聖書の言葉には全く嘘・偽りがない。」ということ、「この五〇年間イエス様の言葉を信じて一回も裏切られたことがない。」と締めくくっています。第四章「私の長谷川保論」には長年にわたり信仰による交わりを持ち、終生長谷川保を「先生」として尊敬と信頼の念を抱き続けた堀口勇牧師の「長谷川保試論」が記されています。キリスト者としての長谷川保と一人の牧師との深い交流のなかで語られてきた言葉は、聖隷創立者の信仰がどのように鍛えられ、高められていったかを垣間見ることのできる試論として興味深いものがあります。

長谷川 保と聖書1

国(王)権、人権、そして長谷川 保

聖隷学園 宗教主任　佐柳　文男

「神は、祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、…」

（テモテへの手紙一　六章十五節）

中華人民共和国が有人宇宙飛行に成功した。無事帰還した飛行士は「人民解放軍と中国国民の栄誉を世界に明示することができた」と語ったという。国家主席を初め中国の政治権力の座にある人々も「国の威信」が高められたことで自信と誇りを持ったと伝えられる。報道によれば、日本も負けてはならないと考える人々がいるらしい。日本には有人宇宙飛行を行う技術がある、やろうと思えばできる、国の名誉のために日本も有人宇宙飛行をやるべきだと考えているという。

国の栄誉、国民の名誉は一人あるいは少数の人が空高く雄飛することによって確立されるのであろうか。王の盛んなる権勢によってであろうか。地上に福祉国家を確立することによってではないのだろうか。地上に飢えや病、障害、社会的不正義などによって多くの人々が悩みや苦しみのうちに放置されているときに、遥か上空を誰かが雄飛したり、月面を歩行したりすることが、どうして国の名誉になるのであろうか。有人宇宙飛行を実現出来ない国民に、誇りや名誉はないというのだろうか。

長谷川保は三二歳の折、一九三六（昭和十一）年に、不敬罪の廉で憲兵隊の取調べを受け、「申告書」を書いた。『夜もひるのように輝く』一二〇頁以下、および『ヤコブの梯子』一九九頁以下に全文が収録されている。そこでは、天皇は神ではない、天皇の名によって行われている政治は理想のものではないと喝破される。良い政治とはどんな政治であるかが堂々と宣言される。言いたい放題を言ってのけた大胆雄渾なる文章である。天皇を輔弼して（天皇の名を騙って）政治に当たる者共への忌憚のない批判である。長谷川保はこれを憲兵隊に提出したが、結局不敬罪は沙汰止になってしまった。憲兵隊もよほど閉口したものと見える。天皇陛下特別御下賜金受領の三年余前のことである。

冒頭に掲げた聖句の一部、「王の王」が申告書に引用される。日本語には名詞の複数形がないが、こだわって訳せば「諸王の王」となる。神は地上の諸々の王を超えて、彼らを支配する王であるという意味である。聖書には地上の王に対する服従を勧める戒めもある。「人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです」（ローマの信徒への手紙十三章一節）。同様の文言は聖書の各所に散りばめられている。王は神の委託を受けて人々を治める、だからもし王に神の意思に反した政治があるなら、人民は彼を王座から引き下ろす権利を持つということにもなる。地上の王は絶対者ではないということである。人の上に立つ者は人に仕える者であるということである。

聖書は神（諸王の王）の栄光は人々の平和と相関すると教える。地上において、王ないし権力の座にある者が絶対者とされて栄えても、国民が福祉安寧を持たず、人権を踏みにじられる状態では国家の名誉はないと考える。いわんや、たとえば有人宇宙飛行のような「壮挙」にも国家の栄誉はない。最も小さい者の人権が保障されるときに、王の栄光、国家の名誉が確立されると考える。

憲兵隊への長谷川保の申告書を貫いている考え方は聖書の思想そのものである。「万世一系」などという根拠のない主張を盾として天皇の威光を飾り、百五十万にのぼる結核患者が「大地の上に身の置き所もない」状態に放置される。拙劣なる政治を敷きながら、その総覧者なる天皇を絶対者なる神とする。長谷川保は日本の政治をこう喝破して、軍部および天皇の取り巻きに対して痛撃を与えた。長谷川保が目的としたことは平和な福祉国家の建設であった。

◆聖隷歴史資料館のご案内◆

開館時間は一〇時～一七時です。展示をごゆっくりご覧いただけるよう一六時三〇分までにご入館ください。

休館日は、土・日、祝祭日及び聖隷学園の休業期間とさせていただいておりますが、聖隷集団の各法人・施設の職員、入居者の皆さんは、時間外や休館日であっても入館できます。

時間外や休館日に入館を希望される方は、予めお問い合わせください。

聖隷歴史資料館では、十一月から「牧ノ原やまばと学園」特別展を開催しております。創設者 長沢 巌牧師の志がどのようなものであったかを掘り起こし、あわせて地域に仕える榛原教会の働き、メイ・マクラクラン宣教師との出会いが「やまばと学園」の誕生とその後に大きな役割を果たしたこと、榛原教会の愛の実践が今なお牧ノ原やまばと学園の働きを支えていることを紹介しています。この特別展は二〇〇四年八月末（予定）までの予定です。この機会に、是非一度、ご来館ください。お待ちしています。

尚、二〇〇四年九月（予定）からは「神戸聖隷福祉事業団」特別展を開催する計画で、準備が進んでいます。